

茨城県の水戸市に、佐藤宗明という歯科医がいました。この佐藤氏は、知る人ぞ知る名医でした。氏は若い頃、その佐藤氏の家に入り込んでいて、佐藤氏よりいろいろと教えを受けていたのです。ある日のこと、氏は放っておいた虫歯が痛み出して、食事も眠ることも出来なくなりしました。とうとう我慢できず、佐藤氏のところへ駆け込んだのです。氏は「先生、おまかせします。何本でも抜いてください」と叫びました。

佐藤氏により手際よく抜歯の処置を受けると、あれほど騒いでいた痛みが嘘のように引いたのです。強烈な痛みが去り、身も心もスッキリとした氏は、「あーあ、楽になった」と思わず声を発しました。そんな氏を見ながら、佐藤氏は厳しい表情で「あなたは普段、多くの人に純粹倫理の話をしているが、自らの実践は今ひとつだね」と言ったのです。氏には、その言葉の意味がすぐには理解できませんでした。

佐藤氏はさらに話を続けました。

「私は永年この地で歯科医院をやらせていただき、数多くの人の歯を治療してきました。抜歯の経験も数え切れないほどある。その数多くいる患者さんの中で、ただ一人、忘れ得ぬ人がいる。その人は抜いた歯に深々と頭を垂れ、『なんと私は親不孝者であろうか。大事に使えば一生使える丈夫な歯を両親より頂きながら、自分のワガママのために、このように抜かなければならなくなつた。本当に申し訳ない』



すべては授かり物 感謝の心で生きよう

え・牧えみこ

と詫びたのである」
そして「その人物に比べ、君はいったい何だ。あー楽になつたと、その程度の心境なのか」と指摘したのである。
氏は自分の至らなさを恥じるとともに、世の中には想像を絶するような人がいるものだと思いました。今まで自分は、何でも出来ている、解っているという慢心がどこかにあったが、本当は何もできていない、何も解っていないということ、痛烈に思い知らされたのです。
何事においても、「自分はできている」と錯覚しているところが私たちにはあります。とくに身近なものほど「当たり前」と思っている節があります。口では両親に対して感謝の気持ちを持っていると言いつつ、実際にやっていることはお粗末極まりないレベルです。
物が見える、好きな所へ自由に歩いていける、おいしく食事ができる等々、どれを取っても自分で創ったものは何ひとつとしてないのです。すべて授かりものなのです。自分だけの力で生きてきたと思いついて入っている人間が、あまりにも多くこの世にはいます。
授かり物であれば、もつと心を込めて大切に扱わなければなりません。見落としているところがないかどうか、もう一度、身近なところを振り返ってみましょう。そして小さな気づきを大切にしてください。できることから取り組んで見ましょう。必ずや、今までは少々違う世界が拓けてくるはずですよ。